

平成28年度 学校関係者評価書

鈴鹿市立鈴峰中学校		達成状況	学校自己評価	学校関係者評価	改善点
授業改善 授業研究の 推進	①めあてと振り返りを連動させ、わかる授業への授業改善を図る。 ②年間3回の公開授業(一人1回以上)の公開授業を実施し、市内でその成果を発信する。	年間1人1回 計3回の公開授業実施 研究発表会参加者数 97名	○めあてと振り返り活動が連動した授業が生徒にも教師にも定着してきた。 ○研究発表会に向け、全職員が協力して準備を進めていくことができた。 ●授業アンケートで、めあてや振り返り活動が「できなかった」または「あまりできなかった」と答えた2割の生徒をどのように授業に参加させていくか。 ●本年度までの取り組みを来年度以降、どのように生徒の主体的な学びにつなげていくか。	*授業改善と授業公開の意識向上が連動して理想的な傾向である。 研究発表会に取り組みむことで、教師と生徒の意識向上が実証された。直ぐ効果は出ないかもしれないが次年度も続けてほしい。	・年間3回、1人1回の公開授業を継続していく。めあての内容や明示の仕方、タイミング、振り返り活動の仕方について、研修をさらに深めるとともに、生徒の主体的な学びをどのように取り入れていくか、検討していく。 ・上記の取り組みを通して、アンケート項目「学校の授業は楽しい」の結果向上につなげる。 ・生徒の承認活動の原点に立ち戻り、承認内容にこだわらず、全生徒ができるだけ多く承認されるように、意識して取り組む。 ・教師からの承認活動だけでなく、生徒同士の承認活動も行うことができるように、学校行事などの機会を活用した学級づくりを行う。
	③全国学力・学習状況調査の結果を分析し、授業改善に活かす。	結果分析の実施 生活実態調査の分析 校区学力向上委員会の開催	○中学校区の担当教員が集まり、指導課の先生を招いて、校区の子どもの算数科・数学科における強みや弱みを分析し、改善策を検討することができた。学力向上委員会の実施により、中学校区での「子どもの目指す姿」が明確になりつつある。 ●分析した結果を授業でどのように活かしていくか。	*公開授業はよい雰囲気、生徒も誰かに見てほしいと発言の意識が持てていふに働いていた。 *研修が増えると、生徒とかかわる時間が少なくなるのが気になる。	・短期目標設定について、今年度の取り組みを継続しながら、目標設定の仕方や「学びの達人」の有効な活用方法について、さらに研修を深める。 ・長期目標を持たせ、それを達成するために短期目標を立てるという意識を生徒に持たせる。(キャリア教育)
	④生徒が授業を評価する機会を定期的にもち授業改善につなげる。(「学校の授業は楽しい」80%以上)	生徒アンケート肯定7月68.1%→11月68.5%(鈴鹿市は69.4%)	○年度が後半になると、授業内容の難度が上がるにも関わらず、アンケート結果がよくなっていることが成果である。 ●生徒が「楽しい」と感じる授業＝「わかった」と感じることができる授業を組み立てる必要がある。 ●授業での承認活動がもっと必要である。	*学力をつけるため先生方は日々指導しているが、学年があがるにつれ生徒が自分で学習する力をつけることが大切。 *自力で勉強している生徒はよいが、学力が難しい生徒に十分かわかって指導してほしい。	
	⑤生徒に長期目標と短期目標をたてさせ、対話を重ねることで、教師が生徒の承認欲求の方向性をつかむ。	学期ごと長期目標設定 2週間ごと短期目標設定、その振り返りの実施	○短期目標の振り返りを班単位で行うことで、クラスの仲間のことをきちんと見ている生徒の姿があり、また、その結果を伝えることができるようになった。振り返りをしている時の生徒の雰囲気がとてもよい。 ○「私の未来設計図」のやりとりを通して、生徒ががんばろうとしていることが把握できた。 ●目標設定の低い生徒へのアドバイスが足りなかった。 ●生徒が「学びの達人」のどのレベルまでステップアップできたのか、振り返る機会があったよかったです。	*少人数は接する機会が増えてよい。 *親のアンケートからも先生が信頼を得ているのがわかる。生徒愛を持ってなるべく接する時間を確保してほしい。 *人数が少ないからできることもあり。	・小テストを実施し、その結果や授業の最後に書く自己評価シートの分析を行い、授業改善の資料とする。
	①少人数を活かし、個に応じたきめ細かな授業の工夫と改善に努める。	「自分の考えや疑問が発言しやすい」 1学期とて62.8%肯定 2学期とて63.5%肯定75.4% 2学期肯定1年生82.1% 2年生76.4% 3年生67.7%	○生活班の人数と教え合い活動の人数と近いところがあり、関係性ができやすく役割分担が明確にできる。 ○少人数の利点を生かし、ペアワークが行いやすく、一人ひとりに目が行き届きやすい。ITは個別指導がタイミングよくでき、特別支援の視点からのサポートもできる。 ●学年別に見てみると学年が上がるにつれて肯定的意見が減少している。学習内容の理解度の把握や学級内の教え合い活動など授業展開の工夫が必要である。 ●ITの持ち方や形態など、効果的に学力を上げる工夫ある活用方法を考える必要がある。		
学習ボランティア の活用	①図書館環境整備や運営にかかわる図書館ボランティアの活用を図る。 ②サマースクールで小学校の先生や地域の大学生の活用を図る。	毎月2日間×4名 のべ30人の学習支援ボランティア 小学校教諭、教育実習生の参加	○新刊本の受け入れ作業をしてもらうことで、図書登録が済み次第すぐ新刊を並べることができた。 ○前年度より多くのボランティアが関わることで、マンツーマンに近い指導ができた。 ○校区の小学校の先生も来ていただいたので、質問しやすい雰囲気ができた。また、教科指導に関することで連携を図ることができた。 ●夏休みだけでなく、年間を通して取り組みを進めることも今後検討されるべきである。 ●地域の方を含め関わっていただけの人数がもっと増えると、より手厚い指導ができる。	*学習ボランティア活動とともに環境ボランティア活動の実例も取り上げ実情を高めてほしい。 *サマースクールは対象生徒以外勉強してもよいという形でちよつとでもできることが増えるとうい。	・学習ボランティアを広く募集することや小学校との連携を深め一人ひとりの課題に合うようにする。 ・サマースクールに参加した生徒へのアンケートを実施し、生徒のニーズの把握に努める。
	①「朝の読書」「朝の学習」「質問タイム」「サマースクール」等を実施する。	「朝の読書、学習」毎日、「質問タイム」定期テスト前、「サマースクール」、夏休み各学年5日間	○サマースクールの生徒アンケートからは、子どもたちは優しく教えてもらい、よくわかり、よかったという意見が多かった。○朝読書、朝学習は毎日の習慣として、朝から落ち着いた学習を進めるのに効果的である。 ●質問タイムのあり方を検討すべき(講義形式or質問形式)。テスト前だけでなく定期的に行ってはどうか。 ●現在の質問タイムは、5教科のみであるが全ての教科で行ってはどうか。		・質問タイムだけでなく、放課後や定期テスト前の補充学習について、必要に応じて検討する。また、期間や教科についても検討を進める。 ・教科での図書館利用の機会を増やす。
補充学習	②学校図書館を活性化し、年間一人当たり10冊以上の貸出しを推進し、読書を通じた学びを進める。	9.4冊(2月5日現在) ※昨年度7.5冊	○今年度は、国語科や社会科で図書館を利用した授業を行った。また、その際に貸し出しも行った。 ○多読賞、ポイントカードの発行、しよりの配布の取り組みで図書館利用の意欲を高めている。 ●のべ人数としては多いが、個人差がある。	*どんな内容の本が今の子どもたちに人気なのかを私たちも把握しているといふので図書便利などで紹介してほしい。	・図書館だよりを通して、図書館にある本の紹介を積極的に行うなど、図書館に足を運ばせる手立てを取る。
	①職場体験学習4日間の取組を推進する。 ②職場体験学習に向けての「すずか夢工房」の人材を1回以上活用の推進を図る。 ③キャリア学習につながる学習において、地域の先輩や卒業生などから学ぶ場を設ける。「将来の夢目標がある」80%以上 ④進路情報を適切に提供し、個に応じた進路指導を行い、進路保障を図る。	①38事業所で4日間実施②1年ようこそ先輩、2年命の出前授業③卒業生等に進路を聞く「夢目標がある」肯定的意見1学期71%→2学期73.9% 3学年通信40号発行(1月現在)きめ細かな情報提供 進路説明会1,2年の保護者も参加	○当該学年の行事に合わせて外部から講師を招いての活動が行われており、行事に向けての意識付けを高めたり、自分の進路を考える機会となっている点は成果である。 ○ゲストティチャーを迎えての進路学習は、地域の8名の方との出会いを通して、生徒はその職業や人間的魅力を感じ取る機会ももった。 ○職場体験学習を通して、88人の生徒(106人中)が職業について考える機会になったとアンケートに答えている。 ●今後、生徒数の減少に伴い事業所数、業種などの関係で、二人以上のグループを組めなくなる事業所も考えられる。 ○高校生活入門講座への積極的参加を呼びかけるため、高校から案内が届くたびに進路通信を発行した。結果、のべ207人の生徒が41の学校見学に参加した。	*職場体験学習を通して、地域との連携や職業意識の向上が養成されている。コミュニティスクールの典型的な指針である。 *他の地域の生徒の実態を見る機会があっても、よい経験と思う。	・教師の職場への最初の働きかけなど、次年度への引継ぎを確実にすることで、事業所との信頼関係が維持できる。 ・キャリア教育のために「すずか夢工房」の人材を積極的に活用する。 ・できるだけ早い段階からの進路相談を行うようにしたい。
キャリア教育 進路指導	①1時間+学年×30分の家庭学習の定着率80%を目指す。	家庭学習調査での学習時間の確保 全体1学期50.7%、2学期58.7% 1年生1学期61.7%、2学期64.6% 2年生1学期58.6%、2学期53.0% 3年生1学期30.2%、2学期59.7%	○1学期に比べ、2学期では、全体の定着率が上がった。提出する最後には、保護者に意見を書いてもらっている、子供の様子を把握してもらえ。 ●取り組みの目的を「継続させる」とすると、学習時間の見直しが必要(最低学習時間への変更など)。「テスト期間(短期的)」とすると、テスト計画表と二重になってしまっている。 ●必ずしも時間と点数は比例しない。学習意欲がないとまったく取り組まない。個々に適した学習方法を定着させる必要がある。	*頑張りや認めてやることによりさらにより頑張りへとつながる。 *校区の生徒は幼いので先生の言葉かけが重要。	・各学年の家庭学習時間を見直すとともに、取り組み期間をテスト週間以外に設定する。
	②校区小中連携会議と協働し、家庭学習の推進週間を設けるなどして、家庭学習の定着につなげる。(「家庭学習をしている」80%以上)	生徒アンケート結果の肯定的意見 家庭学習の定着全体1学期84.4%→85.0% 1年生:80.9% 2年生:86.8% 3年生:86.7%	○宿題など家庭学習への意識は、高い水準となっている。 ●家庭学習習慣は、定着しているが、学習内容をしっかり理解できる取り組みが必要 ●家庭学習週間を設定した場合、テーマを自由に設定して「やらされている感」を持たないようにしてはどうか。 ●小学校の取り組みと中学校の取り組みと交流機会を持ち、小学校から中学校へ継続した指導ができる。	*生徒は先生が大好き。声かけで愛が伝わるし、学力より大切なものもある。 *教師、生徒の連携、密着感が高まっている現状が素晴らしい。	・家庭学習に取り組みややすい課題を愛が伝わるし、学力より大切なものを生徒に周知した上で、その結果を再度検討し実態把握に努める。
生徒の成長や努力を認める 取り組み	①「生徒承認ファイル」の活用により、承認活動を活性化させるとともに、普段から自己効力感をたかめるかわりを増やす。「先生は私のよい所や頑張りを認めてくれる」70%以上	生徒アンケート結果の肯定的意見 全体:1学期88.1% 2学期85.7% 1年生91.6%(とて57.1%) 2年生89.6%(とて48.1%) 3年生75.6%(とて37.8%)	○積極的肯定は、達成できていないが、肯定的にとらえている生徒は、80%を超え、昨年よりも上がっている。 ○教員間での情報共有や、個々への声かけが適正に行われていることや、承認活動への工夫が見られるようになった。 ○紙ベースでの、後々に振り返ることができる。 ○認められたことで、もっと手伝おうという意識が芽生えた。 ●承認活動内容や生徒の把握を、学年を越えて共有できるとクラブ活動の指導などにも生かされるのではないかと考えられる。 ●形式的になってきたのか、システムへの入力が減ってきている。承認活動について再考が必要。 ●承認したが、名前がわからず声をかけるだけになった。しかし、意識することで声をかける機会が増えた。	*鈴峰中もさらに生徒数が減少していきと思われる。生徒も学年を越えて知っているところが多い点。学年という枠にとらわれず、全校生徒の名前を把握してもらえとよい。生徒のほうも全先生を知っていることで、生徒のよいところ、問題点を職員室で話題にしてもらえたらと思う。	・色々な場面(①その場②承認ファイルの活用③生徒同士)で承認活動につなげる。きめ細やかにこころなうとともに、昨年同様に「生活のあゆみ」等を通して生徒の実態をつかみ適切な承認活動へとつなげる。
	②全教育活動を通していじめのない集団づくりを推進する。(「クラスでは安心して学ぶことができる」70%以上)	生徒アンケート結果の肯定的意見 7月88.0%→11月87.5%	○いじめアンケートを学期ごとに行っているが、いじめにあった・いじめを見た、という件数が昨年度よりも確実に減少している。 ○「クラスでは安心して学ぶことができる」に対して、肯定的意見が1学期79.7%、2学期82.2%と上がったのは、自己効力感が高まったことで、他の人にも優しく思いやりを持って接することができたのではないかと考えられる。 ●10人に1人は安心して勉強できないと感じているので、しっかりと受けとめていく必要がある。	*人権フォーラムで小学生が全員参加できたのがすごいことだと思う。発表できなかったとしても雰囲気はわりと他人の考えが聞けて今後の中学校生活に役立つ。 *人権教育に学校、地域、家庭など、どの分野でも適応される複雑な領域でもあるので大変な教育である。	・今後ともことごとく、大人が人として大切なことを継続して伝えていく。 ・生徒アンケートの肯定的意見75%以上を目標にする。
	③「私たちの道徳」の活用を推進するとともに、地域や保護者とともに人権意識を高められるよう道徳の授業公開や集会、文化祭などで啓発の機会を設定する。	6年生全員参加の校区人権フォーラムの実施(中学生は代表のみ参加)	○校区の小学6年生全員が参加し、10分散会に分かれて中学生が司会・進行を務め、こどもたちが主体となって行うことができた。 ●小学生の話合いを中学生がまとめていく形で進められたが、互いに意見交換をするなど中学生も参加しやすいフォーラムになると良いのではないかと。目的によって中身の検討も必要。小学生の不安を取り除くことが目的であるならば、中学生への質問の場という設定でもよいのではないかと。 ○各学年とも、子どもたちの実情に合わせて実施し一定の効果があった。あらゆる教育活動の中で日頃から道徳的な話しをしていく必要がある。 ●どの学年がどこをやるかの教員間での打ち合わせが不十分であった。道徳計画を再度見直し、およびその学年の割り振りをするなど活用しやすいのではないかと。	*いじめは減っているけど0じゃない。 *いじめに対する個人の気持ちの受け止め方は異なるためしっかりと受け止める必要あり。 *小学校でも言葉遣いで結構あると聞。こどももしっかり小中連携ができるとうい。	・人権集会では、中学生も討論に参加できる形態にしてほしい。 ・学校として系統立てた学年ごとの人権学習計画をもう少し意識して取り組んでいく必要がある。 ・人権について学ぶ機会を設け、生徒だけでなく、教員や親も研修し続けること。 ・本年度の様に、生徒(生徒会)からも「いじめをなくすには？」と考える機会を設け、いじめをしない雰囲気を作ることに。
人権教育	②6年生全員参加の校区人権フォーラムを開催し、互いを尊重できる仲間作りを進める。	6年生全員参加の校区人権フォーラムの実施(中学生は代表のみ参加)	○各学年とも、子どもたちの実情に合わせて実施し一定の効果があった。あらゆる教育活動の中で日頃から道徳的な話しをしていく必要がある。 ●どの学年がどこをやるかの教員間での打ち合わせが不十分であった。道徳計画を再度見直し、およびその学年の割り振りをするなど活用しやすいのではないかと。		
	③「私たちの道徳」の活用を推進するとともに、地域や保護者とともに人権意識を高められるよう道徳の授業公開や集会、文化祭などで啓発の機会を設定する。	子どもの実情にあわせて実施	○各学年とも、子どもたちの実情に合わせて実施し一定の効果があった。あらゆる教育活動の中で日頃から道徳的な話しをしていく必要がある。 ●どの学年がどこをやるかの教員間での打ち合わせが不十分であった。道徳計画を再度見直し、およびその学年の割り振りをするなど活用しやすいのではないかと。		

平成28年度 学校関係者評価書

鈴鹿市立鈴峰中学校						
評価項目	本年度の活動(具体的な手立て)と目標	達成状況	学校自己評価	学校関係者評価	改善点	
生徒指導 交通指導	①生徒会・委員会から交通安全や学校の決まりを守る啓発活動の活性化を図る。 ②学校や保護者、地域が連携して定期的にあいさつ運動を実施する。	毎日の登校・下校指導 月・木曜日の委員会・生徒会での挨拶運動 年間8回校区挨拶運動実施	○交通委員・生徒会での啓発活動。交通委員では学級掲示用のジャンボポスター作成や文化祭での発表。生徒会では交通安全川柳の募集を行った。 ○一日の始まりがこころよい挨拶から始まることから、生徒の学校生活に明るさを感じられる。 ○生徒のことをいつも見守っているという生徒の安心感が感じられるようになった。 ●校区への啓発や小中連携を進めるべき。	*通学路別集会、現場検証を通して意識し、現場認識の向上を高めてほしい。基本は生徒自身の問題。道いつばいに走るのを何とかしないと、地域からの苦情も多い。 *毎日先生は街頭指導で立っただけ。もった地域が動かないといけない。交通指導を地域にどう宣伝していくか。年1回くらい保護者も立っただけではないか。 *中学生のあいさつはできている。指導の賜物。学年によって違う。カラーがある。 *年間8回の校区あいさつ運動実施の組織連絡を明確にしたい。	・学校、地域、家庭の連携を強化する。 ・講話直後に話し合いの場を設ける。 ・不登校生徒(予備軍)への早期対応をする。(不登校生徒を生まないため) ・支援会議は引き続き金曜実施が良い。 ・ケース会議を適宜開く。	
	③職員全体で報告・連絡・相談を徹底し、問題行動発生件数の削減、交通事故件数の削減、不登校生徒数を半減を目指す。	問題行動1件(昨年度の-8件:1月) 交通安全教室4月(1年生) 自転車講習(7月) 不登校生徒数(30日以上12月末)昨年度8人、今年度9人	○別室対応や家庭訪問などでの対応により、良い方向に向いている生徒もいる。 ○教育相談期間があることにより、生徒から声が聞け、生徒に向き合うことができていく。 ○「生活のあゆみ」での交流や休み時間を活用した生徒とのかかわりを意識できた。 ●大きな交通事故が4件あったので、これからも交通に関わる活動を継続していくことが大切。 ●依然として不登校生徒がいることに対する取組をしていく必要がある。	○問題行動が大幅に減少した。 ●講師の方の話を聞いて、自分なら何が出来るか等、学級で考え話し合う機会があると良い。(ふり返り)	*地域からも見通しの悪い交差点の建物の移動など要望しているが難しい。	・組織図(この時はこの人に伝える、この人が動く等)を明確にする。
	③講師招聘による啓発活動などを設定し、自己指導能力を高める取組をする。	教育支援課による研修(携帯電話のモラル、万引き防止教室)命の出前講座、防災講習	○スクールカウンセラーに助言をもらい、早期に対応することができた。 ●支援部会での話しが学年全体で共有できていないことがあったので、早期に共有できる体制作りが必要である。 ●担任等が一人で抱え込まないようにすることが大切。 ●会議を進める上で、よりよい支援をするためにコーディネーターが優先すべきケースを考えスムーズに進めていく必要がある。	*子ども一人ひとりに向き合っていく時間を先生にやってほしい。 *特に学習、友達、家庭環境で困り感のある子の支援をぜひやってほしい。 *不登校は鈴峰は少ないほう。 *不登校生徒、特別支援生徒共通の課題を見出し、支援部会を適宜開催していくことを進めてほしい。 *先生に声をかけてもらうのが有効。 *自分に合う、合わない先生がいるので多方面からのアプローチがいる。	・別室対応をひき続き行える方向で考える(時間をきつて等)。 ・月に1回程度、部会の中でケース会議(一人にスポットをあてて)を持つなど、早く手をうていく。	
特別支援 教育 多文化 共生教育	①学年会や特別支援部会で細やかな情報共有を行い、スクールカウンセラーの助言をもとに、早期に具体的な支援策を講じる。	定期的な支援会議(毎週金曜日)	○ケース会議を開き、早期に支援策を講じ外部に繋ぐなど、支援することができた。 ●タイミングが遅れないように迅速な連携を継続していく必要がある。	*先生に声をかけてもらうのが有効。 *自分に合う、合わない先生がいるので多方面からのアプローチがいる。		
	②特別支援コーディネーターを中心に支援部会を適宜開催して、保護者、医療、外部機関との連携を図り、途切れのない支援をする。	ケース会議(適宜)	○ふるさとサミットや、相模大会に参加することができた。 ○保護者も含め、生活支援をすることができた。 ●進路支援を踏まえ、学習支援をしていく。(学力として話し言葉はのびてきたが、文章力に繋がっていないので支援していく必要がある)	*勉強が第1だが、学校は子どもたちのおし自由に話しかけてもらえるところがある。ほめてもらえる、声かけてもらえるのも嬉しい。	・お弁当の日は良い取り組みなので、担当者の負担軽減を図る。	
	③外国人生徒の特性・能力に応じた支援による学力保障と保護者支援に努める。	長期休業中の学習サポート 保護者支援 取り出し授業(週2時間)	○お弁当の日の実施により、食材や自分が何を食べているかについての関心や簡単な調理技術は上がったと思われる。 ●給食の指導は本来幅広い学びの場となるものであるがクラスによっては指導の差があり、食への関心・マナー等の定着にはばつきがある。	*中学校教師の指導領域、時間の増加が心配される。 *弁当の取組は、各自が食育に関心が持てる。	・食への関心・マナーの定着をはかるために栄養教諭を活用し、指導の機会を増やす。	
給食指導 食育	①アレルギー対応などの研修を進め、安全安心な給食を実施する。	食物アレルギーの内容を含めた校内研修を実施	○食物アレルギーによる除去食対応について、対象の生徒それぞれの対応を全教職員が共通理解しておくことができた。			
	②各教科や給食を活用し、目的を持った食育指導を進める。	お弁当の日を年3回実施				
地域と ともある 学校づくり	①学校行事や学校公開とあわせて学校運営協議会をもつことで学校運営協議会の活性化につなげ、地域の協働による学校教育活動を推進する。	年6回学校運営協議会の開催	○地域の意見・要望などが見えてくるので、それを活動内容を反映させやすい。 ○子どもの生の姿を通して話し合いが出来る。 ○地域の方は協力的で、暖かい風を送ってもらっている。 ●委員のみならず先生たちの交流をする時間があると良い。	*メール配信はとても役立つと思う。大雪の日など特に思った。 *生徒の生活実態がわかってよい。		
	②学校だより・学校ホームページ・メール配信等を通して保護者や地域に学校情報や連絡を発信するとともに、PTA活動の活性化により、保護者・地域に学校へ足を運んでもらう機会を設け、開かれた学校づくりを進める。	保護者アンケート 89.2% HP更新回数か月平均3回 メール配信年間40回以上	○学校行事の様子をHPに載せることで、行事に行けない家庭でも様子を知ることが出来る。 △メール配信は必要のある内容に絞ったため、昨年よりも配信回数が増えた。 ●部活の試合結果をメール配信やHPで公開した方が良い。 ●学校開放日などの情報発信やPRの場としてメール配信を使用する。	*生徒のいない家庭であっても団楽等でも話題にも上り学校生活がわかってよい。 *本校の学校運営協議会の機能性は低く、支援も低いほうである。しかし、協働作業や協議会になるという学校運営、勤務時間の増大につながる恐れがあるのでどうしたものか。 *小中連携はいいことだ。これから中学校につながる。地域の人が広く集まり親睦感もうまれている。	・第1回の学校運営協議会に先生が参加する等、先生を紹介する場をつくる。 ・メール、HPを使って、授業に来ていただくように呼びかける。 ・保護者参加型の授業にするなど、授業内容を検討する。	
	③校区ブロック連絡協議会・校区健全育成協力者会議など地域の組織と協働し、ラジオ体操の会などを開催する。	参加人数450人	○部活動や体育科からの呼びかけがあり、参加人数が増えた。 ○ラジオ体操の効果が見直されており、世代を超えた交流ができる大切な機会にもなっている。 ●参加賞はもう工夫必要である。	*ラジオ体操の参加者が増えている。年に一度のことだから、さらに啓蒙していくとよい。 *教職員の勤務時間延長が問題になっている。一日11~12時間勤務者が70~80%にもなっている。		
	④家庭学習・特別支援教育・生徒指導・外国語活動・人権学習・ラジオ体操の会・学力向上等の様々な活動を通して小中連携を深める。	計画通り実施	○外国語活動や人権フォーラム等で校区の小学校との連携ができ、小学校と中学校との垣根が低くなっている。 ○ほぼ同時期に家庭学習調査をが小中学校で行われるため、家庭で話し合いを持つことが出来る。 ●連携の日程の調整がなかなか難しい。 ●事前に打ち合わせが出来ると良い。			
働き やすい 環境づくり	①普段からの報告・連絡・相談による対話を重視し、ひとりでおかえり込められないように、組織としての連帯感を高める。	定期的に行われる各部会や学年会	○全体的に対話しやすい雰囲気はある。報・連・相はしっかりできていた。 ○職員の人数が少ないが、他学年から応援をしてもらえる雰囲気はある。 ●他学年での出来事を代表だけでなく、職員みんなが共有した方がよい。	*クラブ活動は民間の活用も通していいけれども、クラブの先生との関係も大切だが、平日の授業も大切。生徒も先生も休みも嬉しいかもしれない。	・人数が少ないというデメリットはあるが、意思疎通はし易いというメリットもあるので、コミュニケーションをしっかりと取りあひながら学年を超えた助け合いをしていく。	
	②各種会議の精選と短縮化を図り、分掌内容の見直すとともに、休みやすい雰囲気づくりに努め、「総勤務時間の縮減」につなげる。	過重労働のべ人数(85時間以上/1月の超過勤務者1月末)今年度24人 昨年度26人	○休暇のとりやすいつきとるようにできた。 ●行事が多いので精選を考慮していく必要がある。 ●絶対人数が少ないので、作業分担をしても一定の職員に加重がかかってしまう。 ●休日の部活動は休日も入れて、メリハリのある活動にしていく。	*卓球部がなくなるのは残念だが、生徒数教員数減で仕方ない。 *少人数だからよいこともあるのでメリットを活かした学校運営ができるようにしたい。	・分掌の負担をできるだけ軽減するように行事の精選を考えていき、外部の研修会にも参加できるようにしたい。	
	③信頼される教職員のための研修などの充実に努める。	コンプライアンス 体罰防止、救急救命 職員交通事故0件	○救急救命講習は2回実施している。 ●日々の細かいことにお互い声をかけ合っていく必要がある。	*学年を超えて生徒のことを理解できる。		